

はじめに

甲骨文の人の形をした漢字を論文のテーマに選んだ理由は、教授の漢字に関する講義を聞く中で、古代漢字の独特な書体に強い興味を抱いたからである。授業後、自ら関連書籍を調べ、甲骨文という古代の文字体系について深く学んだ。その中でも特に、「人」の形を含む甲骨文字に心を引かれた。これらの文字は形が生き生きとしているだけでなく、豊かな文化的意味を持ち、古代の人々の自己認識や社会、自然への考え方を直接反映している。そのため、甲骨文の人形漢字を切り口に、その形態や構造の規則性を分析しながら、漢字の起源や古代文化の深い意味についてさらに探求することに決めた。

甲骨文は、中国で確認されている最古の体系的な文字で、商代に起源を持ち、占いの結果や王室に関わる重要な活動を記録するために使われた。漢字の起源として、甲骨文は高い象形性と構造化を持ち、線で物の形や動作を描き出し、古代の人々が自然や社会をどのように観察し理解していたかを表している。甲骨文の中で、特に「人」に関する文字は、単なる記号ではなく、古代の文化を反映しており、社会構造や親族関係、宗教信仰、生活様式への深い認識を示している。

本文のテーマである「人型漢字」とは、甲骨文の中で「人の形の図形」を基本的な構成要素として作られた漢字を指す。「人型漢字」の構造は、漢字の「六書」の理論と深く関係し

ている。後漢の許慎が『説文解字』でまとめた六書とは、漢字の造字原理を象形・指事・会意・形声・転注・仮借の六種類に分類したものである。この六つの原則は甲骨文にも明確に表れている。象形文字は、物の形をもとに描かれた文字の作り方であり、甲骨文字の構造の基盤となっている。例えば、「人^亻」という文字は、人が直立している姿を簡潔に表現している。会意文字は、二つ以上の独立した漢字を、それぞれの意味に基づいて組み合わせ、新しい意味を持つ文字を作るものです。例えば、「休^休」は「人が木に寄りかかって休む」という意味を表している。

漢字は人類によって創造されたため、強い人文的特性を持っている。その中で「人型漢字」は、中国古代人の知恵を証明し表現するものである。この種類の漢字は、「人」の図形を通じて、人間が自身に向ける関心、社会生活への認識、そして自然に対する理解を伝えている。現在の研究では、人型漢字を専門に扱ったものは少ないものの、「人に関する漢字」に言及する著作は多くある。例えば、落合淳思は著書『漢字の構造』（中央公論新社 2020 年）で、古代の人々が五官や姿勢などをもとに甲骨文を創造し、これらの文字が単なる記号ではなく、人の生活経験の象徴や表現方法となっていることや、漢字の構造に封じ込められた社会と文化の記憶を論じている。白川静は著書『漢字 - 生い立ちとその背景 - 』（岩波新書 1970 年）で、古代中国の神話や呪術と、それらに根ざした古代中国人の生活や思考をもとに、甲骨文や金文、漢字の成り立ちについてを論じている。

しかし、「人に関する漢字」と本文で扱う「人型漢字」は異なる概念である。「人に関する漢字」は人の性格、道徳、生活、心理、行動など、人に関連する意味を持つ全ての漢字が対象となる。一方、本文で言う「人型漢字」は漢字の形態に着目したもので、甲骨文字の中で完全な人（人間）の形を含むものだけを指す。また、「人型漢字」と「人部の漢字」は同じ概念ではない。両者に重なる部分はあるものの、それぞれが属する漢字の範囲は異なる。このように、「人型漢字」は形態的特徴を基準として分類される独自のカテゴリーである。

本論文では、甲骨文における人型漢字の数を整理し、分類した上で、その造字の起源について考察する。甲骨文には決められる文字数がないため、収集した資料がすべての漢字を取り入れるものではない。また、すべての漢字を個別に分析するのは難しいため、各種類から特徴的な漢字を選び、重点的に研究を行うこととした。

必要な資料を効率的に集めるために、『甲骨文小字典』¹（王本興，文物出版社）、『甲骨文字小字典』²（落合淳思，筑摩書房）の二つの著作を参考にした。選び出した漢字は一覧表にまとめ、論文の最後に添付する。

¹ 王本興『甲骨文小字典』文物出版社，2006

² 落合淳思『甲骨文字小字典』筑摩書房，2011

第一章 人型漢字の分類

人型漢字は甲骨文において「人の形」を主要な構成要素として含む漢字を指し、人体の各器官に関連する漢字は含まれない。本研究では、「人の形」という特徴的な要素に注目し、分析と議論を進めていくことを主軸としている。統計によると、さまざまな形態を持つ人型  は、甲骨文において非常に頻繁に使われる構成要素であることが分かった。

人型に関係する文字を言えば、まず挙げなければならないのが、人間そのものを象徴する「人」という文字である。

人 ³ 象形文字。『説文』⁴に「人、天地之性最貴者也。此籀文象臂脛之形（人は天地の間で最も高貴な性質を持つ生物である。これは籀文である。字形は、腕を下げ、脚をまっすぐに伸ばした人の姿を表している）」。『禮運』⁵に「人者其天地之徳、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也。人者天地之心也、五形之端也（人は、天地の徳の産物であり、陰陽が交わって生まれた存在であり、神霊が集まって成した成果であり、五行の中でもっとも優れた要素である。人は天地の核心であり、万物の形の起源である）」。『文源』⁶に「象人側立形、有頭背臂脛也（人が横向きに立つ姿であり、頭、背、腕、

³ 本稿に掲載するすべての甲骨文図（本図を含む）は、王本興『甲骨文小字典』より選定したものである。

⁴ 『説文』は『説文解字』の略称であり、以下同様とする。

⁵ 白川静『字通』（ソフトウェア版）に掲載されている『禮運』の資料。

⁶ 林義光『文源』上海古籍出版社、2017

脚が備わっている形である)」。甲骨文の「人」は、横向きに立つ人の形を表しており、象形文字に分類される。この横向きの人形以外にも、さまざまな形の人型が存在する。古代の人々は、多様な人体の姿勢を観察し、それを記録して対応する漢字を生み出したのである。例えば：

大	𠤎	文	𠤎	亦	𠤎	夫	夫	天	𠤎
走	𠤎	交	𠤎	孕	𠤎	母	𠤎	子	𠤎
欠	𠤎	見	𠤎	鬼	𠤎	など。			

人の多様な形態から、古代の人々が自身にどれほど細やかな関心を寄せていたかがうかがえる。人型漢字の構造にはすべて人体の形が含まれているが、造字の考えの違いにより、文字ごとの構造には大きな差異が見られる。一部の文字は「人」の形状だけで構成されているのに対し、他の文字は「人」に他の図形を加えて構成されている。このような特徴から、人型漢字を二つの大きい種類に分類することができる。第一の種類は、「人」の形だけで構成された文字である。第二の種類は、「人+図形」で構成された文字である。これらの種類をさらに細かく分類することができる。では、まず第一の種類について説明する。

1. 「人」のみ

人型漢字の中には、他の図形が一切なく、人の形だけで構成される種類がある。これらの漢字は、古人が人体のさまざまな形態に基づいて作り出したもので、人間の姿勢や行動と

密接に関係している。筆者の統計によると、第一種類の漢字数は全部で 31 個である。「人」のみで構成された文字を観察すると、一人の形だけで構成されたものと、複数の人の形で構成されたものがあることがわかる。この特徴に基づき、さらに「一人」と「複数人」の二つの小さい種類に分類することができる。

①一人

古人が人体の形態を詳細に描写したことで、甲骨文には多様な人の形が存在している。この形態の違いに基づき、さらに四つのタイプに分類することができる。それは、正面に立つ人・器官を強調した人・性別・年齢を示す人・動作を伴う人である。

ア 正面に立つ人

例えば：大、夫、文、立など。

大  象形文字。『説文』に「天大、地大、人亦大、故大象人形（天が大きい、地が大きい、人もまた大きいという意味である。だからこそ、大は人の形に似せて作られたのである）」。

字形を見ると、これは両手と両足を広げ、正面を向いて立っている人の形であり、単なる「人」 よりもさらに具体的である。古代では人を「大」と見なしていた。なぜなら、人は万物の霊であり、古人はその概念を表現するために、四肢を広げた人の形で「大」の字を作ったのである。例えば、大雨 .

夫  象形文字。『説文』に「夫、丈夫也、従大、一象簪

也。周制以八寸為尺。十尺為丈、人長八尺、故曰丈夫（夫という字は大人の男性のことである。『大』の形に『一』を加えて、簪を象徴している。周代には八寸で一尺とし、十尺で丈とした。身長は八尺（だいたい一丈）であるから、「丈夫」というのである）。古代には、未成年の男子は髪を下ろしていた。成人すると、つまり二十歳を迎えた後、男子は加冠の儀式を行い、髪を束ねてまげを作り、簪で頭の上に固定した。この束髪と加冠の後、男子は「夫」、つまり大人の男性と見なされるようになった。したがって、「夫」の本義は成人男性を指すものである。

文  象形文字。『説文』に「錯畫也、象交文（互いに交錯した筆画は、交差してできた模様のようなものである）」。胸に模様が刻まれた正面の人の形のように、胸の前に交差する模様がある様子を表している。胸の前に模様を刻むのは、中国の古代からこのような習慣を持っていたものである。『禮記・王制』⁷に「東方曰夷、被髮文身、有不火食者矣（東方の部族は夷と呼ばれ、その中には髪を解いて、体に入れ墨模様を入れる習慣を持つ者もいる。その中には火を使わずに食事をする者もいる）」。『孔穎達疏』⁸に「文身者、謂以丹青文飾其身（文身をする人とは、彩色や模様を使って自分の体を装飾する人を指す）」。『莊子・逍遙游』⁹に「越人断髮文身（越国の人は髪を剃り、体に入れ墨を入れる習慣がある）」

⁷ 白川静『字通』（ソフトウェア版）による。

⁸ 白川静『字通』（ソフトウェア版）による。

⁹ 方勇『莊子』中華書局、2015

これは越人が髪を切り、体に模様を刻んだことを指している。春秋時代の越国ではすでに文身の風習があったことがうかがえ、この行為が古くから続いていることがわかる。

立  象形文字。『説文』に「立、住也（立ちとまる）從大立一之上」。甲骨文は、正面を向いて立つ人の形を表している。大の字と区別するために、古人は「𠂔」の下に「一」を加え、地面を示すようにした。これにより、立つという意味を表現できるようになった。

イ 器官を強調した人

例えば：天、見、孕、欠、聞、望、鬼など。

天  象形文字。『説文』に「天、顛也、至高無上（天は、頭の上を指す意味であり、天は最も高く、何もそれより高いものはないのである）」。古人は「天」という字において頭部の描写を重視していた。古人が人の頭を至高無上なものと見なしていたことがわかる。彼らにとって、天空は手の届かない存在であり、人の頭の上がまさにその天空であると考えられていた。そのため、人の頭を大きく強調して、至高無上の天空を表現したのである。

見  象形文字。『説文』に「見、視也（見は、見ることである）」。下部は跪いて座っている人のように見え、上部には特に強調された横向き大きな目が描かれている。目の特徴を誇張し、「見る」という本義を強調している。「見」

の視線は前方を見ていることを示している。

孕  象形文字。『説文』に「褕子也（子供を包み込む）」。子を身に宿している、妊娠している形を表している。字形はその意味を明確に反映している。

欠  象形文字。『説文』に「張口氣悟也。象氣從人上出之形（口を開け、体内の気が散らばって外に出る様子）」。口を前に向け、大きく開いた形を通して、字の意味を表現している。人が口を開けて息を吐きながらあくびをしている様子を表していると考えられる。私の推測では、人は精力が不足しているときにあくびをするため、そこから「不足」という意味が派生したのである。

聞  象形文字。『説文』に「知聲也。從耳、門聲（音を知る）」。甲骨文字では耳の部分が特に誇張されて描かれており、聞くという機能が強調されている。一目でこの字の本義が「聞く」であるとわかる。

望  会意文字。『説文』に「望、出亡在外、望其還也（元の場所を離れ、外に出て、戻ってくることを期待する）」。甲骨文は目の特徴が誇張された人の形であり、人体の上に縦に大きな目が描かれている。これは、人が何かの上に立ち、目を大きく見開いて遠くを見渡している様子を表している。例えば唐の李白の詩『静夜思』¹⁰の一節「挙頭望明月

¹⁰ （清）孫洙『唐詩三百首』中華書局，2009

(頭を上げて月を望む)」にも見られる。

鬼  象形文字。『説文』に「鬼、人所歸為鬼。從人、象鬼頭。鬼、陰氣賊害（人が死ぬと鬼になる。『鬼』という字は『人』から成り、上部は鬼の頭を象徴する。鬼は陰気で他者を害する）」。

古代の人々は、人が死んだ後にも霊（鬼魂）が存在すると考えていた。そのため、「鬼」という字の本来の意味は鬼魂を指している。『禮記・祭義』¹¹には「衆生必死、死必歸土、此謂之鬼（すべての命を持つ物は死を迎え、死後は土地の中に帰する。これを鬼という）」。

鬼の甲骨文字においては、奇妙な頭部を持つ人間の体の形をしており、古代の人々は人間の頭と区別するために、頭部を大げさで怪しく描くことで、自分たちが考える鬼のイメージを表現したのである。なぜ鬼の頭が「田」の形で描かれているのかについては、古代に人々が木の枝で仮面を作り、鬼の格好をして祭祀を行ったことに由来し、「田」という形は、木の枝が交差しで作られた面具の形を表しているのではないかと考えられる。

ウ 性別・年齢を示す人

例えば：母、父、子など。

母  象形文字。『説文』に「母、牧也（哺育である）」。

母の字形は左を向いて膝をついた女性が両手を胸の前で交差させ、二つの黒い点が女性の乳房を表している。「母」という字の本来の意味は母親を指し、そこから「養育や哺乳」の

¹¹ 白川静『字通』（ソフトウェア版）による。

意味に派生したものである。

父  会意文字。『説文』に「父、矩也。家長率教者。从又舉杖（父は、規則であり、家の主人として子供を教育する人である）」。「父」は手に杖を持つ姿で、子どもを叱ったり教育したりする家の主人を表している。考古学の研究によると、商代では女性が家庭の事務や管理を担っていたことが示されている。これに基づき、男性は主に子どもの教育を担当していた可能性があるかと推測される。そのため、「父」という字は教育を象徴する杖と結びつけられたと考えられる。

子  象形文字。『説文』に「子、十一月陽氣動、萬物滋、人以為偁（旧暦十一月、陽気が回復し、万物が蘇るにつれて、人々も行動を起こしたり、希望を寄せたりし始める）」。「子」の字形を見ると、幼児の頭と両手が非常に明確に表現されており、頭にわずかな産毛が描かれていることから、ちょうど生まれたばかりの幼い子どもを示している。そのため、「子」の本来の意味は赤ん坊である。

エ 動作を伴う人

この種類の文字は、いずれも人の形をもとにしているが、それぞれ異なる動作を表している。

例えば：交、走、元など。

交  象形文字。『説文』に「交、交脛也（両足を交差させること）」。「交」の字形を見ると、両脚を交差させて正面に立つ

人の形である。古人は、人の脚が交差する形を用いて、「交わる・交錯する」という意味を表していた。

走  象形文字。『説文』に「走、趨也（走る）」。字形を観察すると、「走」は両手を曲げ、走る際に両腕を前後上下に振る動きを表している形である。本来の意味は「走る」ことである。『釈名・釈姿容』¹²に「徐行曰歩、疾行曰趨、疾趨曰走（ゆっくり歩くことを『歩』といい、速く歩くことを『趨』といい、さらに速く歩くことを『走』という）」。

元  指事文字。『説文』に「元、始也（元は始まりである）」。『漢書叙伝』¹³の注「元、首也（元は頭である）」字形は横向きに立つ人の形であるが、同時に「二」を使って人の頭部を強調している。本来の意味は「人の頭」である。

『説文』にの「始也」という解釈は、その派生義と考えられる。古人は、人の上部が頭であると認識していたため、「元」という字は後に「始まり」「第一」などの意味に派生し、さらに後には「元首」という言葉を作り、リーダーを指すようになったのである。

¹² 任繼昉、劉江濤『釈名』中華書局、2021

¹³ 白川静『字通』（ソフトウェア版）による。

②複数人

複数の人の形は一定の方位で並べられて組み合わせられている。並べ方に応じて、三つの種類に分けることができる：並列、対面、反対。

ア 並列

如：並、从（從）、比、夹。

並  象形文字。『説文』に「並、併也（並ぶこと）」。
二人が並んで立っている形で、足元の横線は地面を示している。字形から分かるように、「並」の本来の意味は並列である。

从  会意文字。『説文』に「从、相聽也（言葉をお互いに聞き、従うこと）」。
一人がもう一人に従っている形で、二人は前後に並んでおり、互いに従い、共に行動する意味を持つ。甲骨文の「从」と「比」は同じ字であり、その後、二つの字に分化した。金文  ¹⁴（從）では、左側に「彳」を加え、下部に「止」を加えることで、行動を示す意味が表されている。

比  会意文字。『説文』に「比、比密也。二人为從、反從為比（『比』は、相互に密接に従うこと。二人が前後に従うことで『從』の字が成り、その字を逆さに書くことで『比』の字が成る）」。
段玉裁注「其本义为相亲密也（その本来の意味は、相互に親密であること）」。「比」の字は、

¹⁴ 本稿に掲載するすべての金文図（本図を含む）は、漢典（<https://www.zdic.net/>）より選定したものである。

一人が他の人に従い、親密に寄り添っている様子を表している。甲骨文や初期の金文の資料では、「比」と「从」の甲骨文の左右の部分が似ているため、多くの甲骨学者は「比」と「从」が同じ字であると判断している。しかし、よく見ると、「比」の二つの「人」の下部の足が同じ方向に曲がっており、二人が非常に近づいていることを示している。横たわっている状態おの可能性もある。二人の腕は前方に伸ばされたり、前後に肩を組んでいる姿が形成されている。これによって「比」の字は親密な関係を表すものとされているのではないかと考える。

夹  会意文字。『説文』に「持也（両側から支え助けること）」。字形を見ると、正面に立っている人の腕の下に二人を抱えているような形になっている。両側の人、中央の人を支えている姿を示しているため、「夹」の意味は「支え合う・助け合う」という意味になる。『墨子・雑守』¹⁵に「守大門者二人、夾門而立（番人は二人おり、門の両側に立ち、守る役目を果たしている）」。

イ 対面

如：鬥 ^{dòu}  (斗)

鬥  象形文字。『説文』に「兩士相對、兵杖在後、象鬥之形（二人の兵士が向かい合って立ち、兵器を後ろに構えて、戦いの姿勢を示している）」。髪を振り乱した二人が素手で

¹⁵ 白川静『字通』（ソフトウェア版）による。

戦っている姿を表している。字形から、古人が力や技を競い合いながら格闘している様子が想像できる。『論語・季氏』¹⁶に「血氣方剛、戒之在鬥（元気に満ちあふれた年ごろでは、好戦的なことに用心すべきである）」。

ウ 反対

如：北

北  会意文字。『説文』に「乖也（そむく）从二人相背」。二人が背中合わせに立っている姿、背くという意味を表している。中国の先民は主に北半球の地域に住み、採光や暖かさを取るため、家はほとんどが北を背にして南向きに建てられていた。南面は陽光が当たる側であり、その反対側が「北」となったため、「北」が南と反対の方向を示すようになった。後に、「北」の意味が「北方」と「背対」の両方を持つことから区別をつけるため、「北」の下に「月」を加えて新たに「背」という字を作り、体の背や背く・反対の意味に表すようになった。

2. 人＋図形

人の形だけで構成される文字以外にも、人の形に他の図形を加えた文字も非常に興味深いものである。筆者の統計によると、第二種類の漢字は80個であり、人型漢字の大部分を占めている。これらの漢字は、古人の思想、日常の行動、そ

¹⁶ 『論語』中華書局、2020

して社会的な活動と深く結びついている。第一種類の人の形だけで創造された字は、主に人の身体や状態を中心に描かれているが、次に議論する第二種類の字は、古人の社会活動を描写したものである。字形から、動詞と名詞の二種類に分けられる。

①動詞

例えば：執、夢、死、宿、監、即、異、浴、疾など。

執  会意文字。『説文』に「持也（持つこと）」。

手で物をしっかり握る姿を表している。もう一つの説によれば、左側は刑具であり、右側は左向きに跪いている人である。この人の両手は刑具で固定されており、「犯罪者を捕らえる」という意味を表している。古文において、「執」には確かに「拘束する・逮捕する」という意味がある。「執」の造字の起源については、筆者は「拘束する」という意味に基づいて作られたという説の方が有力であると考えます。なぜなら、甲骨文は筆画が簡潔で分かりやすいことを重視しており、もし単に「持つ」という意味を表すだけなら、左側は正方形や縦線で表現すれば十分であり、これほど複雑に描く必要はないからである。この「捕らえる」という意味から派生して、「執」という字は後に「持つ」という意味をも表すようになり、『説文解字』の解釈のように用いられるようになったのである。

 会意文字。『説文』に「夢、不明也（夢ははっきりしないもの）」。「甲骨文編」¹⁷に「像人依床而睡、夢之初文（人が床に寄りかかって寝ている様子を表し、夢の最初の文字である）」左側は寝台の形に似ており、これは人が寝台で寝ていることを示している。右側の部分は、眠っているのに大きな目を開けている人を表しており、夢を見ていることを意味しているのが分かる。古人は夢を神秘的な現象と見なし、それが魂や未来の予兆、あるいは神々からの啓示と関連があると考えていた。この考え方は後の文化にも大きな影響を与えた。例えば、『周公解夢』¹⁸という夢の解釈に関する書物が古代中国に伝わっていた。

 会意文字。『説文』に「漸也、人所離也。民之卒事也（死は、氣力が尽きることであり、人の魂と肉体が分離することを示すのである。これは民衆にとって最後の事である）」。段玉裁注「形体與魂魄相離（身体と魂は分離する）」。人が亡くなった人のそばでひざまずき、身を屈めて死者を弔っている姿を表している。少し悲しい感じがする。右の「尸」は、頭のない、体が欠けた人の形を象徴していると考える。商代の人々は、死者に対する弔いを非常に重んじており、それが殯葬の複雑さからも明らかである。中国文化では「死」に関して特に慎重であり、死者の身分や地位に応

¹⁷ 漢典 (<https://www.zdic.net/>) による。

¹⁸ 『周公解夢』は、中国古代の文化遺産であり、後世の人々が周公の名を借りて著したものである。書中にはさまざまな夢の事例が列挙され、それぞれの夢について吉凶の予測が記されている。

じて、死に対する呼び方がそれぞれ異なっている。『禮記・曲禮下』¹⁹に「天子死曰崩、諸侯死曰薨、大夫死曰卒、士曰不祿、庶人曰死」。

宿  会意文字。『説文』に「宿、止也（とまる）」。家の中で草の敷物の上に座ったり横たわったりして眠る様子を描いている。「目」は、敷物の形状を表していると考えられる。資料によると、古代には椅子や凳子のような座具は存在せず、文明の発祥地である中原地域では草木が豊富だったため、草で作られた敷物が登場した。人々は食事や読書、休息を行う際、地面に敷物を敷いてその上に座るのが一般的であった。この習慣から「席地而坐（地べたに直接座る）」という熟語が生まれたのである。

監  会意文字。『説文』に「監、臨下也（下を見ること）」。人が容器の前に立ち、頭を下げて中を覗き込んでいる様子を描写している。金文では、さらに容器の上部に小さな横線が追加され、器の中に水があることを示している。

「監」の字形から、古代社会では鏡が存在せず、人々は水を入れた器を使って自分の顔を映し、身なりを整えていたことがわかる。

即  会意文字。『説文』に「即、就食也（近づいて食事する）」。「即」人が食べ物が盛られた器に向かい、食事をしようとしている様子を描写している。左側の図形の尖った

¹⁹ 漢典 (<https://www.zdic.net/>) による。

部分は、器の中の食物が溢れるほど満ちており、非常に豊富であることを表している。「即」の本義は「食事をする」とである。『易經・鼎卦』²⁰に「鼎有実、我仇有疾、不我能即（鼎の中に食べ物が満たされ、私の妻は病気であったが、今では私が助けなくても自分で食事ができるようになった）」。「食事する」の過程には、「食器に近づく」「食器に寄り添う」という動作が含まれているため、「即」にはもう一つの意味である「近づく」「寄り添う」という解釈が派生した。『詩經・衛風・氓』²¹に「匪來貿絲、來即我謀（男は実際に糸を交換しに来たのではなく、私に近づくために他の意図があったのである）」。



異 会意文字。『説文』に「異、分也（区別する）」。「禮記・樂記」²²に「樂者為同、禮者為異（音楽の特徴は共通点を求めることであり、礼儀の特徴は異なりを求めることである）」もう一つの意味は「かぶる」である。『積微居金文説』²³に「甲文異字作人頭上戴物、兩手奉之形、異蓋戴之初文（『異』の甲骨文は、人的な頭の上に物を載せ、両手でその物を奉じている形を表しているのである。『異』は最初に物を載せるという意味を持つ文字である）」つまり、字形に基づけば、「異」の本来の意味は「（仮面、帽子、または装飾を）かぶること」と解釈すべきである。字形を観察すると、

²⁰ 馮国超『周易』華夏出版社，2017

²¹ 程俊英・蔣見元『詩經注析』中華書局，1991

²² 国学大師 <https://www.guoxuedashi.net/>

²³ 楊樹達『積微居金文説』上海古籍出版社，2007

一人の人物が両足を開いて立ち、両手は頭のそばに挙げる姿が描かれている。その頭部は特別な形状で、人型文字の第一種類で言及された「鬼」字の頭部の「田」の形に似ている。もし「鬼」の「田」が仮面を表しているとすれば、「異」は確かに頭に仮面をかぶっている様子を描写しているように見える。

浴  会意文字。『説文』に「浴、洒身也（体を洗うこと）」下に大きな器を描き、その中に水が盛られ、水の中には左向きに立つ人の姿が描かれている。人の周囲に描かれた四つの点は人体の両側から水滴が落ちる様子を示している。入浴を表現したものである。『増訂殷墟書契考釋』²⁴に「注水於盤而人在其中、浴之象也（水を容器に注ぎ、人がその中に立っている様子は、入浴を象徴する）」中国の沐浴の歴史は、三千年以上前の殷商時代に遡ることができる。古代中国語において、「沐」「浴」「盥」「洗」はそれぞれ異なる意味を持っている。東漢王充の『論衡・譏日』²⁵に「浴、去身垢（体の汚れを取り除く）」。「浴」は、特に身体や上下肢の部分を清潔にすることを強調する。

疾  会意文字。『説文』に「疾、病也」。矢が人の腋下を射抜いて負傷した様子を表している。矢で人が傷つけられることを疾病の象徴として使ったのは、当時の社会環境と密

²⁴ 羅振玉『増訂殷墟書契考釋』東方学会

(https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/bb/SSID-13362499_%E5%A2%9E%E8%A8%82%E6%AE%B7%E5%A2%9F%E6%9B%B8%E5%A5%91%E8%80%83%E9%87%8B_%E4%B8%8A.pdf)

²⁵ 漢典 <https://www.zdic.net/>

接に関連している。古代の戦争は頻繁に行われ、弓矢は常用の武器であり、戦場では人々が矢で傷を負うことが多かった。そのため、「疾」の最初の意味は「矢傷」や「外傷」を意味していたと考えられ、そこから「病気」という意味へと転じた。また、「疾」字には「矢」が含まれており、「矢」が弦から放たれた後の速さを感じさせるため、この字はさらに「速い」「急速」の意味にも派生した。『説文』に段玉裁注「矢能傷人、矢之去甚速、故從矢會意（矢は人を傷つけることができ、速度も非常に速いため、矢を基にして『速さ』の意味を理解する）」。

②名詞

例えば：老、美、衆、尾、^{xián}次、央、光など。

老  会意文字。『説文』に「考也。七十曰老（老人は『考』とも呼ばれ、七十歳の人を老人と呼ぶ）」。段玉裁注「考、老是也」左向きに立つ人が腰を曲げ、背を丸め、手に杖を持っている姿である。『殷虚文字類編』²⁶に「甲文象老者倚仗之形（甲骨文は老人が杖をついて支えている様子である）」。すべての老人が杖を必要とするわけではないが、杖を持つ姿で老人を象徴している理由は中国の伝統的な道徳観と深く関係しているからである。古代中国社会では、高齢者の増加は政局の安定、社会の発展、天下の豊かさ、そして民衆の安定した生活の象徴とされてきた。そのため、歴代の

²⁶ 国学大師 <https://www.guoxuedashi.net/>

賢明な統治者は、老年層の社会的地位を向上させることに尽力し、最終的に「尊老」の風潮を社会に根付かせた。『禮記』には、老人に杖を与える制度が記録された「五十杖於家、六十杖於郷、七十杖於國、八十杖於朝（五十歳であれば家の中で杖をついて歩くことができ、六十歳であれば村で杖をついて歩くことができ、七十歳であれば都で杖をついて歩くことができ、八十歳であれば朝廷に出入りする際に杖をついて歩くことができる）」。国家が七十歳以上の高齢者に杖を与える習慣は、尊敬と祝福の意味を込めたものである。

美  会意文字。『説文』に「美、甘也」。段玉裁注「甘者五味之一、而五味之美皆曰甘、引申之凡好皆謂之美

（『甘』は五味の酸・甜・苦・辣・咸の一つであり、五味の中で美しい部分はすべて『甘』と呼ばれる。さらに派生して、すべて良いものは『美』と呼ばれることができる）」。頭に飾りを付けて立つ人の姿を表している。「美しい」を意味する。古人は、人の頭に高く曲がった羽やそれに似た装飾が付けられている様子を美の象徴と考えていた。このため、そのような姿をもとに「美しい」「美好」といった意味を持つ字が作られたのである。

衆  会意文字。『説文』に「衆、多也」。太陽の下で多くの人々が活動している様子を表している。三人を太陽の下に配置して意味を表す構成は、当時の社会状況と深い関係がある。古代では、祭祀、農業生産、兵役などの活動に多くの人手が必要であった。この字の構成は、そうした社会的状況

のいずれかを具体的に反映しているものである。

尾  会意文字。『説文』に「尾、微也、从到毛在尸後。古人或飾系尾、西南夷亦然（尾は細かい末端を示しており、尾の位置は身体の後ろにある。古代には、尾を飾りとしてを付ける人がいたのであり、西南地域の少数民族にも同様の習慣が存在していた）」。段玉裁注「『後漢書・西南夷列傳』曰盤瓠之後、好五色衣服、制裁皆有尾形。按尾為禽獸之尾、此甚易解耳。而許必以尾系之人者、以其字從尸。人可言尸、禽獸不得言尸也。凡全書內嚴人物之辨每如此。人飾系尾、而禽蓋似之、許意如是（盤瓠は伝説上の神獣である。盤瓠の子孫は五彩の華やかな衣服を好み、そのデザインにはしばしば尾の形をした装飾が施されている。『尾』は禽獣の尾を指しており、これは分かりやすい。許慎は『尾』が人に関連していると考えた理由は、『尾』の字形には『尸』という部首が含まれているからである。『尸』は人を指すために使われるが、禽獣には使われない。許慎は『説文解字』において、人と動物の区別に非常に厳しく、これは本の全体にわたって貫かれている。彼は、動物の尾は自然に存在するものであるが、人間の『尾』は装飾が施されたものであると考えたのである）」。つまり、「尾」の構造的な根拠は、人の装飾的な尾に由来しており、本義は「尾」である。多くの動物には尾があるが、人間には尾がない。それにもかかわらず、「尾」という字が人を用いて尾の意味を表しているのは、人を用いることで最も目立ちやすく、明確に尾を象徴できるからだと考え

えられる。

次  会意文字。『説文』に「慕欲口液也（ある物を羨ましく思い、それを手に入れたいと願ってよだれを垂らす）」。左向きに跪いている人は、大きく口を開けている様子を描写している。「彡」はよだれを表しており、食べ物を渴望していることを意味している。

央  会意文字。『説文』に「中央也。从大在冂之内。大、人也（中央の意味。『大』の字が『冂』の内部に位置することを象徴しているのである。『大』は人を表す）」。正面を向いた人の姿で、首に「凵」形の器具をつけ、器具の中央に頭を置いている様子を表している。このことから、「中央」という意味を会意させている。「凵」形は特に頭部に描かれており、頭を固定しているように見えるため、これは犯人の首にかけられた枷を表していると推測される。

光  会意文字。『説文』に「明也、从火在人上、光明意也（明るい。火と人を組み合わせて成り立つ漢字であり、その意味は明るい光である）」。「光」の形は、人の頭の上に火がある様子を表している。火は人々に光をもたらし、その本義は「明るさ」である。しかし、火を頭の上に直接乗せることは不可能であるため、これは薪を使って照明を行い、その火を高く掲げた様子を描写したものと推測される。

第二章 人型漢字と『説文解字』人部の関係

『説文解字』は、東漢の許慎によって編纂された、中国最初の字書である。許慎は初めて「六書」の理論を提唱した。それは、象形・指事・会意・形声・転注・仮借の六つであり、漢字の分類と研究に理論的な基礎を築いた。すべての漢字を小篆の字体で表記しており、漢字の本義を解釈し、字形を分析した。また、部首を中心に、540の部首を分類した。その中で「人部」は245字を収めており、『説文』にの中で最も多くの字が収められている部首の一つで、人に関連する多くの字を含んでいる。

人部の字と人型漢字の関係を明確に理解するためには、まず人部の定義を明確にする必要がある。どのような字が人部に分類されるのか。これは、字形、字義、造字法など、さまざまな角度から分析することができる。

①字形に「人」の部首を含む

「人」は象形字であり、人間の側面から見た立っている姿を描いており、顕著な象形的特徴を持っている。許慎は『説文解字』の中で、字形に「人」部首やその変体（「イ」「𠤎」「𠤎」）を含む字を人部に分類した。これらの字は、人に関連する要素を直感的に表現していることが多い。例えば：

仁  ²⁷「从人、从二」人と人との関係を表現しており、仁愛の心を意味する。

²⁷ 本稿に掲載するすべての小篆図（本図を含む）は、漢典（<https://www.zdic.net/>）より選定したものである。

信 𠂇 「从人、从言」人の言葉には信用があるべきことを示す。

任 𠂇 「从人、从壬」責任を担うことを意味し、人間の行動における担う属性を強調する。

②字義が人や人類活動と直接関連している

人部に分類される字は、その意味が通常、人間の行動、特性、または社会関係と密接に関連している。この関連性は、人部字の大きな特徴である。

例えば：

侍 𠂇 「从人」他人に付き添ったり、仕える人を意味し、人と人との従属関係を強調する。

俘 𠂇 「从人、从孚」捕らえられた人を意味し、戦争における人間の役割を表す。

③造字の論理が人と密接に関連している

許慎が『説文解字』の中でまとめた「六書」理論（象形・指事・会意・形声・転注・仮借）は、「人部」字の造字論理を分析するための重要な基礎を提供している。人部には、多くの漢字が「会意」や「形声」の造字方法を採用している。

例えば：

伐 𠂇 「从人、持戈」人が武器を使って伐採することを示し、人と道具の関係を強調する。

伴 𠂇 「从人、半聲」二人が互いに付き添うことを意味し、

人と人との繋がりを強調する。

以上から、『説文解字』の「人部」と本文の「人型漢字」との最大の違いは、研究対象が異なる点であることがわかる。「人部」字は小篆を研究対象としており、多くの字は小篆段階ですでに固定された構造を持っている。一方、本文の「人型漢字」は甲骨文を研究対象としており、字形はより原始的な図形に近く、強い象形的特徴を持っている。漢字の変遷の過程で、漢字の構造は次第に規範化され、整った形になった。そのため、甲骨文から小篆に変遷する過程で、多くの漢字の字形や構造が変化した。例えば：

「依」の甲骨文「」は、包囲構造の字であり、外側は大きな衣服を示し、左右の開いた部分が袖を表している。衣服の中には左向きの「人」が包まれており、人が衣服に依存して体を覆い、からだを暖めることを示している。「依」の小篆「」では、人部が字体の左側に固定され、字形は左右構造に変化した。

「伊」の甲骨文は「」と「」の二つの字形がある。ここでは「人」の位置が固定されていないことがわかる。「伊」が金文「」や小篆「」になると、「人」は左側に固定されるようになった。

「任」の甲骨文も「」と「」の二つの字形がある。金文「」と小篆「」の字形になると、「人」の位置がほぼ固定されたことがわかる。

字書を調べると、人部の字のうち、左右構造の字は小篆の

時期には、基本的に「人」が左側に固定されていることがわかる。

また、上記のように甲骨文中で符号の位置が変わった字だけでなく、符号を追加した字も存在する。『説文』にの「人部」字の中には、多くの字が「人」の部首を追加することによって、元の字から変化したものがある。例えば：

「儀」の小篆「」や、「義」の金文「」。「儀」の金文「」は、「義」の字形に人部首を加えることで形成されたことがわかる。『説文』に「義、己之威儀也（義は自身の威厳と礼儀の表れである）」。段玉裁注「言己者、以字之從我也。己、中宮。象人腹。故謂身曰己。義各本作儀。今正。古者威儀字作義。今仁儀字用之。儀者、度也（『己』とは、この字の形が『我』という字から来ている。『己』は人体の中心部である。形は人間の腹部を表している。したがって、身体を『己』と呼ぶのである。『義』という字の元の書き方は『儀』で、今は修正されている。古代では、『義』は威儀（すなわち威厳と礼儀）を意味していたが、現在では『義』は仁義を表し、『儀』は礼儀を表す。『儀』の意味は『尺度』や『規範』である）」。

もう一つは、ほかの字の字形を借用することによって新しい字をつくる場合である。例えば：

償『説文』に「償、還也（返却することを指す）从人从賞聲」。「償」の金文は「」であり、その金文字形は「人」から派生したものではなく、「賞」の金文「」を借用し

て作られたものである。『説文』に「賞、賜有功也（功績のある人に与えることを指す）从貝尚聲」。「償」字が小篆「𧷑」に変化した際、「賞」の「功績のある人に与える」という意味と区別するために、「人」部を加えたのである。

また、甲骨文の時代にはその物品が存在しなかったため甲骨文字がなく、後世に発明されてから初めて作られた字もある。例えば、“傘”。

以上から、「人型漢字」と『説文解字』の「人部」字の共通点が見られる。どちらも「人」と密接に関連する字を対象としており、人間の行動、特性、社会関係などを反映した漢字を扱っている。しかし、両者の研究対象と範囲は完全には一致していない。「人型漢字」は甲骨文を中心に研究し、字形の象形的特徴を重視している。一方、「人部」字は小篆の字体で表記しており、規範化された構造や多義的な変化に重点を置いている。また、本論文の冒頭で述べられているように、人型漢字の考察範囲には人部の漢字が含まれていないため、人型漢字と人部は相互に独立しており、重なる漢字がないといえる。

第三章 人型漢字の特徴

漢字は中華伝統文化の重要な部分であり、また中華民族の古代文化を記録する最も古い手段の一つである。漢字は長い歴史の中で豊かな文化的な意味を持つ文字体系として発展してきた。最初の漢字（甲骨文）は象形文字が中心で、形が簡潔で分かりやすく、直感的で、深い意味を持っており、人と自然との関係を直接的に伝えることができる。その形は知恵に満ちており、人々の心に響く力を持ち、深い文化的な印象を与える。見た目には、漢字の構造は静的であり、言語記号の基本的な機能を備えており、情報を記録し伝達するために使用される。しかし、漢字の魅力はそれだけではない。それぞれの漢字には、独特の美しさと象徴的な意味が込められており、絵のように生き生きとした連想を呼び起こし、豊かな想像力をかき立てる。つまり、漢字は単なる静的な記号ではなく、象徴的で動的な表現の一つでもある。

漢字の意味は言葉以上のものを表している。それは、人と自然との調和を示すだけでなく、古人が自然をどのように観察し、考えたのかを反映しており、また人と社会、歴史との深い繋がりも記録している。漢字を通じて、私たちは中華民族の文化の起源を知り、先人たちの知恵を感じ取ることができる。漢字は文化の架け橋であり、歴史を伝え、未来をつなぐ重要な役割を果たしている。

人型漢字は、古人の考え方や生活、また原始社会の文化や

習慣を表した特徴的な文字である。人型漢字には大きく分けて三つの特徴がある：

1. 象形文字と会意文字を主とする

六書の観点から見ると、人型漢字は主に象形と会意の構造をもっている。原始的な文字は、人類文明の発展とともに、その起源が象形文字と密接に関わっていることが多い。例えば、古代エジプトでは最初に使用されたのは絵文字であり、第一王朝時代にはこれらの絵文字が次第に象形文字と子音記号を組み合わせた文字体系へと発展していた。また、古代シュメール文字も象形文字をもとに発展した。漢字もこの規則に従い、その起源は象形文字と切り離せない。漢字の初期形態である甲骨文では、象形文字が大きな割合を占めている。象形文字は非常に直接的であり、字形の構造がしばしばその意味を直接的に反映している。例えば、「文」「亦」「交」「孕」などは典型的な象形文字である。これらの字形を観察することで、その具体的な意味を簡単に連想することができる。

象形文字に加えて、会意字も甲骨文において非常に重要な造字法である。会意文字の特徴は、複数の文字を組み合わせ、より複雑な意味を表現することである。例えば、「死」字は人形と倒れる姿勢を組み合わせ、抽象的な概念である「死」を生き生きと表現している。「浴」字は水と人の形を組み合わせ、「体を洗う」という意味を明確に伝えている。このような造字法により、漢字は形象化を保ちなが

ら、抽象的な概念を柔軟に表現する能力も持つようになった。

2. 漢字の「人間中心主義」を反映する

漢字は人類の知恵によって創造されたため、「人間中心主義」は最初から漢字に深く刻まれ、漢字の特徴となっている。

「人間中心主義」は、漢字が他の文字体系と比べて一線を描く独自性を持つ理由でもある。古人は漢字を作り出す際、まず人間自身を出発点として、自分の身体を基準にし、五官を使って自然界を観察し、それによって生活に密接して文字を作り上げた。この独特な文字構造は、人間が自分自身に注目し、また世界を細かく観察し、深く理解していたことを示している。

人型漢字の数は非常に多く、まさに「人間中心主義」を集中して表したものである。正面人型漢字以外、多くの異なる姿勢を表す人型がある。例えば、側面人や頭を横に向けた人、膝をついて座る人、走っている人、両腕を交差させた人、足を引きずる人、物を持つ人、さらには逆立ちする人などもある。これらの描写は多様であり、古人が人体の動きをどれだけ細かく観察し、理解していたかを生き生きと再現している。これらの漢字を通じて、私たちは古人が日常生活の詳細を文字にどのように組み込んでいたかを感じ取ることができる。漢字は単なる交流の媒介ではなく、生活そのものを表現する芸術的な形式であったことがわかる。

さらに驚くべきことに、古人は漢字を創造するとき人体の一部を誇張したり、拡大したりすることにより、特定の意味

を明確に伝えることができた。たとえば、力を表現するために腕の形を大きくしたり、感覚を表現するために目や耳の形を強調したりした。

3. 中国古代の社会文化を反映している

甲骨文における人型漢字は、ほかの漢字と比べて、古人の社会活動や風習をより直感的に反映している。人型漢字の字形を研究することで、私たちは遠古の生活の様子や文化的な習慣について深く理解することができる。例えば：

「死 」字の構造からは、古代社会における葬儀の重要性や、「死亡」に対する人々の理解と態度を読み取ることができる。

また、「宿 」字からは、遠古時代の人類の生活習慣を知ることができる。この字形は、人が草の敷物の上で横になったりして休んでいる様子を表しており、遠古時代には椅子や腰掛けのような座具は発明されていなかったことがわかる。人々は代わりに、ヨシや竹のひもで編んだ草の敷物（席という）を使っていた。席は非常に広く使われており、食事をする時や、会話を交わす時、読書をする時、休む時など、日常生活の中で頻繁に使用されていた。

「監 」字の形から、古代には鏡のようなものはなく、人々は水をいれた容器を使い、水面の反射を見て身だしなみを整えていたことがわかる。この現象は、人々が青銅の冶金技術を習得したあとに、鮮明な像を映し出す銅鏡を発明する

までつづいていた。

要するに、漢字は中国文化と切り離すことはできない。漢字の形態、構造、意味を研究することによって、中華民族の集団文化の特徴について深く掘り下げることができる。その中には、価値観、思考の方法、道徳的倫理、そして美的意識など、様々な側面が含まれており、漢字からそれらを得ることができる。

おわりに

甲骨文における人型漢字は、明確な特徴を持つ漢字の一種である。しかし、これまでの「人」に関連する漢字の研究は主に『説文解字』の人部に集中しており、甲骨文における人型漢字に関する研究は非常に少ない。特に、「人型漢字」というテーマを専門的に扱った研究はほとんどない。

本稿の統計によれば、甲骨文において人型を持つ漢字は合計 111 字である。これらの漢字は大きく二つの種類に分けられる。一つ目は、人型だけから成る漢字であり、合計 31 字である。この種類はさらに二つのタイプに分けられる。一つ目は「一人で構成された字」であり、字形は人型の多様な変化を示している。具体的には、正面に立つ人・器官を強調した人・性別や年齢を示す人・動作を伴う人などが含まれる。もう一つは「複数の人で構成された字」である。二つ目の種類は、「人型」を基盤に他の図形要素を追加して構成された漢字であり、合計 80 字である。字形から、また動詞と名詞の二種類に分けられる。

本稿で取り上げた人型漢字は、『説文解字』の人部の漢字との類似性を持つため、第二章では人部の定義と人型漢字との関係について詳しく論じている。両者の共通点は、いずれも「人」を中心とし、人間の行動、社会関係などに関連する漢字を対象としている点である。相違点は、人型漢字は主に甲骨文を研究対象とし、字形の象形的特徴に重点を置いてお

り、あわせて人部の漢字は含まれていない。それに対して、人部の漢字は小篆を主体とし、造字法を通じて字義や字形を分析することに重点を置いている。また、漢字はその変遷の過程で、字形や意味の変化、新しい漢字の誕生、複数の字が同じ意味を持つ現象など、複雑な進化を遂げてきた。これらを踏まえると、人型漢字と人部の漢字の研究対象は重複していないと考えられる。

最後に、人型漢字の特徴についてまとめた。主な特徴としては、象形文字や会意文字を通じて示される直感的な表現力、人間を中心とした「人間中心主義」、そして深く反映された古代中国社会文化。人型漢字は単なる文字コードではなく、古代人の生活、価値観、自然観察、社会的習慣を映し出す文化的表現でもある。

參考資料

1. 王本興『甲骨文小字典』文物出版社，2006
2. 落合淳思『甲骨文字小字典』筑摩書房，2011
3. 許慎『說文解字』中華書局，1978
4. (漢)許慎撰；(清)段玉裁注；許惟賢整理『說文解字注』鳳凰出版社，2007
5. (清)孫洙『唐詩三百首』中華書局，2009
6. 方勇『莊子』中華書局，2015
7. 任繼昉、劉江濤『釈名』中華書局，2021
8. 『論語』中華書局，2020
9. 馮國超『周易』華夏出版社，2017
10. 程俊英・蔣見元『詩經注析』中華書局，1991
11. 楊樹達『積微居金文說』上海古籍出版社，2007
12. 羅振玉『增訂殷墟書契考釋』東方学会
(https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/bb/SSID-13362499_%E5%A2%9E%E8%A8%82%E6%AE%B7%E5%A2%9F%E6%9B%B8%E5%A5%91%E8%80%83%E9%87%8B_%E4%B8%A.pdf)
13. 落合淳思『漢字の構造』中央公論新社，2020
14. 白川靜「漢字 - 生い立ちとその背景 - 」岩波新書，1970
15. 阿辻哲次『漢字學：『說文解字』の世界』東海大學出版會，2013
16. 朱英貴『漢字形義溯源』人民出版社，2009
17. 林義光『文源』上海古籍出版社，2017
18. 小学堂 <https://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/yanbian>
19. 国学大師 <https://www.guoxuedashi.net/>
20. 漢典 <https://www.zdic.net/>
21. 古詩文網 <https://www.gushiwen.cn/>
22. 白川靜『字通』（ソフトウェア版）